

医療の基本は 患者さまの安全確保

医療機関にとって重要な課題の1つとして最近注目されているのが、セーフティマネジメントだ。関西医科大学附属病院では、迅速なインシデント/アクシデントレポートの収集や集計を行うために、富士通プライムソフトテクノロジーのリスクマネジメントシステム「SafeProducer」を導入。発信者の匿名性の確保を図ると同時に、情報の切り分けによる効果的なセキュリティ管理などを実現している。



上山 泰男 氏

関西医科大学附属病院
医療安全管理部 部長 関西医科大学教授



宮崎 浩彰 氏

関西医科大学附属病院
消化器内科助手 医療安全管理対策委員



並木 みどり 氏

関西医科大学附属病院
医療安全管理部 医療安全管理者



河副 浩明 氏

関西医科大学附属病院
医療安全管理部 課長

セーフティマネジメントを 実践する医療安全管理部

関西医科大学附属病院は、関西でも有数の医科大学の附属病院であると同時に、北河内医療圏における基幹病院として、守口市を中心とした地域医療の中核を担っている。また、平成5年には厚生労働省から特定機能病院としての認可を受け、高度先進医療の開発や提供、優れた人材の育成などに積極的に取り組んでいる。

開設以来70年以上の歴史を持つ同院だが、地域医療ネットワークの推進や総合リハビリテーションセンターの開設など、時代のニーズに応じたさまざまな取り組みを行っている。なかでもIT化には積極的で、平成10年にはオーダーリングシステムをスタート。平成18年1月に開設する附属枚方病院を皮切りに、電子カルテの導入も計画されている。

また、医療事故防止のための安全管理にも早くから着目し、平成14年には専門の部署である医療安全管理部を設置した。そして平成16年には、富士通プライムソフトテクノロジーのリスクマネジメントシステム「SafeProducer」を導入、2月1日から稼働を開始している。「よい医療とは安全な医療のことであり、安全こそ医療の基本だと我々は考えています。患者さまのリスクを減らすことがまず基本で、それが経営の

リスクを減らすことにもなり、最終的には病院の評価を高めることにつながるのです。そのためには、個人ではなく組織として医療事故の防止に取り組む必要があります。それこそが医療機関に求められるセーフティマネジメントだと考えています」と語るのは、医療安全管理部・部長の上山泰男氏だ。

情報を切り分けて管理できる 「SafeProducer」

これまで同院では、インシデント/アクシデントレポートに関して、紙ベースでの管理を行っていた。つまり、あらかじめ決められた書式にしたがって、報告書を書いて提出していたのである。しかし、このやり方には2つの問題があったという。1つは、匿名性が確保できないため、誰もが自由に報告しにくいという点。とくに医師からの報告件数は、どうしても少なくなる傾向にあったという。もう1つは、データの集計に時間がかかるために、分析や解析が十分に行えないという点だ。これらの問



題を解決する方法として、インシデント/アクシデントレポートの電子化を図ることになり、「SafeProducer」の導入を行ったのである。

「SafeProducer」を選定した理由について、医療安全管理対策委員である宮崎浩彰氏は、「第1報と第2報で、情報を仕分けして管理できる点が大きかった」と語っている。これは、職員が自発的に発信した第1報について、まず当該部署で調査を行い、その調査内容をまとめたものを第2報として報告するという、自然な情報の流れを実現できるからだという。「すべての情報を誰もが見られるというのは、情報の管理という面からすると非常に不安な部分があります。『SafeProducer』なら、情報を見る人を特定することもできるので、共有すべき情報とそうでないものを切り分けて管理することができます。セキュリティ面でも安心ですし、第1報の匿名性も確保できます」(宮崎氏)。

「SafeProducer」の導入で 情報の収集から解析へ移行

「SafeProducer」の運用は、平成16年1月13日からの試行期間を経て、2月1日から正式にスタートした。導入に当たっては、各部署の安全管理担当者を集めた導入教育などを行ったのだが、項目選択が中心で操作性に優れた「SafeProducer」の特徴もあり、ほとんど問題なく使い始めることができたという。

入力は院内のオーダーリング端末から行うことができ、その数は現在618台。

職員全員が自由に使える環境が整えられていることもあり、レポートの報告数は月に500件ほどに上るといった。導入以前は月に300件ほどだったというから、およそ1.7倍に増えていることになる。医師からの報告も、以前の2~3%から、導入後は10%程度にまで上がっているという。

導入の効果について、医療安全管理部医療安全管理者の並木みどり氏は、「夜中に起こったことが、翌朝には第2報として上がってきます。安全管理には、スピードも重要な要素です。即座に対応して瞬時に必要な情報を配布できるので、迅速な対応を図る上では非常に大きな戦力になっています」と語っている。また同院では、さまざまな問題に対して、医療安全管理対策委員会やセーフティマネージャ会がいくつかのワーキンググループを作って対策を検討しているのだが、情報がスムーズに上がってくるため、分析や解析に傾注できるようになったという。いわば情報の収集から解析へと、本来行うべき活動に重心を移すことができたわけだ。

情報をやり取りするためのツールとして大いに力を発揮している「SafeProducer」だが、「クロス集計時間の改善」、「報告欄の文字数制限の拡張」など、いくつか改良の要望も寄せられた。これらユーザーの声に答えていくのが、製品としての今後の課題だろう。

システムと使う人間の両輪が 揃って真の安全管理が実現する

「確かに『SafeProducer』の導入によって、院内の情報の流れは非常にス



関西医科大学 附属病院
大阪府守口市文圃町10-15

■ 設 立: 1932年(昭和7年)
■ 診療科目: 29診療科 ■ 職 員 数: 1800名
■ 病 床 数: 991床(内、一般病棟952床/精神病棟39床)
■ 診療時間: 8:30~11:00(初診)、8:30~11:30(再診)
■ 休 診 日: 日曜日、祝日、第2・第4土曜日、創立記念日(6月30日)、年末年始(12月29日~1月3日)
■ 関連病院: 附属香里病院、附属男山病院、附属洛西ニュータウン病院

ムーズになりました。しかし、単にシステムや機械を入れただけでは、医療の安全管理は実現しません。あくまでも使うのは人間だからです。当院の場合も、職員全員の安全管理に対する意識改革が進んだことが、成功の大きな要因になっています。システムと使う人間の両輪が揃って、はじめて真の安全管理が実現するのだと考えています」と、上山氏は安全管理の文化・習慣を育てる必要性を強調した。医療安全管理部は、そのための実働部隊として、院内全体における情報の通り道の役割を果たしているのである。

現在「SafeProducer」を導入しているのは、系列の関連病院の中でも同院だけだ。今後は、他の附属病院にも導入を図り、効率的なインシデント/アクシデント情報の集約などが課題になるという。将来的な電子カルテの導入も踏まえ、関西医科大学附属病院の安全管理システムは、今後も次なるステップを目指して成長していくに違いない。

「SafeProducer」に関するお問い合わせはこちら

株式会社 富士通プライムソフトテクノロジー

インターネットで製品情報がご覧になれます。 <http://www.pst.fujitsu.com>
TEL: 052-937-9977

FUJITSU

THE POSSIBILITIES ARE INFINITE